

新任期保健師が乳幼児およびその家族への家庭訪問で抱く困難感

長山ひかる^{*、1)}、三輪真知子¹⁾、小笠原雅美²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾浜松市役所 健康増進課

【目的】近年、行政では団塊世代の保健師の退職等によるマンパワー不足や保健師の分散配置などにより、新任期保健師においても保健、福祉などの幅広い知識や困難事例の対応など新任期から専門的な能力を求められている状況にある。新任期保健師は母子保健を担当することが多く、複雑な家族背景を持つ妊婦や、外国人世帯、多子世帯など、支援が困難な事例への関わりに難しさを感じている。本研究では、新任期保健師が家庭訪問で乳幼児およびその家族への支援の中で抱いている困難感について明らかにすることを目的とした。

【方法】A市で保健師として勤務してから5年未満の保健師で乳幼児およびその家族への支援をしている保健師7名を研究対象とした。家庭訪問において、支援困難を抱いた場面及び対処方法等について、半構造化面接を実施した。得られたデータは看護師と非常勤での保健師経験のある者1名と保健師経験の無い者6名に分けて質的統合法（KJ法）により分析した。本研究は、本学倫理審査委員会（承認番号：24025）の承認を得て実施した。

【結果】本稿では看護師と非常勤での保健師経験がある新任期保健師1事例について述べる。元ラベルは103枚、7段階の分析を経て最終ラベルは6枚となり、この6枚の関係を考え、【事柄：エッセンス】をつけて構造図を作成した。構造図の説明は次の通りである。新任期保健師の乳幼児およびその家族の支援困難事例の家庭訪問では、【家族へも目を配る：母親のみでなく家族にも関わる】ようにしていた。しかしその後、【行き詰る支援方法：具体的支援方法が分からず保健から福祉へ助けを乞う】があり、もう一方では、【手探りの支援方法：マニュアルや根拠のない中で成果が出せない心細さ】があった。この2つは相互に作用しあっていた。その結果、【関係構築する力の希求：基本的知識の定着と親との双方向のコミュニケーション能力の習得】と【アセスメントする力の希求：支援方法を振り返ることによる判断力の鍛錬】となり、二つの側面は通底していた。【達成度のあいまいさ：支援方法の習得の時期や段階や方法があやふや】は【行き詰る支援方法】、【手探りの支援方法】、【関係構築する力の希求】【アセスメントする力の希求】の根底となり、これらに影響していた。すなわち、新任期保健師は【家族にも目を配る】という視点をもちながら家庭訪問をしていた。しかし、【行き詰る支援方法】、【手探りの支援方法】に困難を感じ、【関係構築する力の希求】、「アセスメントする力の希求」となっていた。【達成度のあいまいさ：支援方法の習得の時期や段階や方法があやふや】がこれらに影響しているという構造であった。

【考察】新任期保健師が乳幼児およびその家族への家庭訪問で抱く困難感は、支援方法が分からないまま家庭訪問をしているため、達成度があいまいとなり、具体的な支援ができるように対象者との関係性の構築や対象者の問題や課題を明らかにするためのアセスメント能力の向上を求めている状況であった。

このことから、新任期保健師が、個人・家族の支援をしていく中で支援に自信を持つことや達成感を感じられることが必要である。そのために、支援方法の習得や段階を明確にした継続的な研修プログラムや職場内でのOJTの内容の充実が必要である。